報告番号　甲　乙　　第　　号

西村　洋平君　博士学位請求論文　審査報告

論文題目：プロティノス魂論の構造と諸問題

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授	納富　信留
	同大学院文学研究科委員	
副査	慶應義塾大学文学部教授	上枝　美典
	同大学院文学研究科委員	
副査	大阪府立大学高等教育推進機構教授	山口　義久

論文の構成

西村洋平君による学位請求論文は、ローマ時代の哲学者プロティノス（205 年頃〜270 年）の「魂」論を主題とし、その基本的な枠組みといくつかの重要な問題を取り上げて論じた意欲的な論考である。難解と言われるプロティノスの魂論を、先行哲学者たちの影響や受容という観点から詳細に検討し、哲学史的な位置づけにおいて正確に理解していく。全体の章立てと構成は以下のとおりである（章と節のみ）。

はじめに

第 1 章　導入——プロティノスと新プラトン主義——

1. 1. 生涯

1. 2. 著作と校訂版

1. 3. プロティノスの論述スタイルとその背景

1. 4. プラトン主義の伝統におけるプロティノス

第 2 章　プロティノス哲学概説

2. 1. 発出、ロゴス

2. 2. 二重活動理論

2. 3. プラトンの思想としての三階層——第 10 論考（V, 1）——

2. 4. 二世界説と認識論

第 3 章　魂の本質について

3. 1. 本質存在（οὐσία）としての魂

3.2.　ストア派の受容と批判

3.3.　ペリパトス派の受容と批判

第 4 章　魂の階層の全体構造
4. 1. 全体と部分、一と多——第 8 論考（IV, 9）——
4. 2. 万有の魂と人間の魂の関係について——第 27 論考（IV, 3）——
第 5 章　性質と魂（本質存在）の違い
5. 1. 本質存在を満たすものと単なる性質——第 17 論考（II, 6）——
5. 2. プロティノスの解答
5. 3. 性質論の一貫性——第 43 論考（VI, 2）での訂正？——
5. 4. 魂、ロゴス、性質——プロティノスのプラトン主義——
第 6 章　感覚論
6. 1. 感覚における受動様態の共有と非受動
6. 2. 器官の受動——エミルソンの解釈——
6. 3. 受動様態の共有（συμπάθεια）について
第 7 章　思考と知性——第 49 論考（V, 3）における自己知——
7. 1. 問題の所在
7. 2. 魂の自己知
7. 3. プロティノス魂論の問題
まとめ

論文の概要

「はじめに」で本論文の方針と射程を示した後、最初の 2 章が予備的な考察を与える。

第 1 章は、プロティノスを理解する上で必要な知見、即ち、生涯、歴史背景、著作『エンネアデス』編纂と現代の校訂、哲学の方法を整理して確認する。研究の基礎となる情報を最新の研究成果から簡潔にまとめたもので、適切な導入となっている。

第 2 章は引き続きプロティノス哲学の概要を論じ、その中核にある「発出」論とそれに基づく存在の階層論、及びその実質を説明する「二重活動」プロセスを解明しながら、彼の哲学を「新プラトン主義」という伝統の中に位置づける。存在論の概観をつうじて、実質的に「魂論」への視座が据えられ、それを論じる基本的構図が与えられる。

本論文の中心をなす第 3 章と第 4 章は、プロティノスが魂の本質、及びその階層の構造をどう規定したかを詳細に論じていく。

第 3 章では、プロティノスがくり返し魂を「本質存在」（οὐσία）であると強調する点を取り上げ、その意図が「生成」とそれに属する「状態」（πάθος）から魂を切り離す基本的な存在論にあることを指摘する。「本質存在」（通常は「実体」と訳される）はアリストテレスのカテゴリー論に由来する術語であるが、プロティノスはこれをプラトン主義的に理解し

て、それを活用して魂をペリパトス派の「形相」でもストア派の「物体」でもない存在者として位置づけている。ストア派についても、批判と同時に、彼らの「混和」という概念を積極的に利用する。さらに、アリストテレスの流れを受けるアフロディシアスのアレクサンドロスによる「魂＝内在形相」論が批判される。これらの関係を検討することで、プロティノスが先行哲学者たちの概念や枠組みを批判的に摂取しながら、自らの理論を独自に構築している様が浮かび上がる。こうした他学派への批判と受容において、「本質存在」としての魂の位置づけの意義が明らかになる。

第 4 章は、魂の階層を全体構造として明確化する。プロティノス哲学において魂は多層をなすが、その中で「万有の魂」と「人間の魂」の難解な関係が検討される。プロティノスは、「魂は人間や万有に属する個別者としては多であるが、それぞれが可能性の全てを含んでおり、全体としては数的に一である」と語る。彼はまず、一なる「全魂」（ὅλη ψυχή）の部分として「個別的魂」があると考える。本論文は、この「全魂」の身分を知性のうちにある魂と解釈する。さらにストア派の批判をつうじて、「人間の魂」も「万有の魂」も同等に「全魂」の一部であるとする立場が提示される。最後に、この魂論が万有のロゴス（乃至、摂理）に従うという自然学・倫理学の議論が、「受動様態の共有」（συμπάθεια）という自然学・認識論を含意することが論じられる。プロティノスはこれらの点でストア派の理論に近接するために、改めて彼らの物体論的魂論を批判してプラトン主義的な枠組みで魂の関係を構築する必要があったのだという。

第 5 章から第 7 章では、これまでに与えられた魂論の全体像に基づき、改めて問題となるいくつかの個別問題が扱われる。

第 5 章では、プロティノスが提示する「本質存在」としての魂と、アリストテレス学派が提案する「内在形相」との違いが分析され、その区別の思想背景が明らかにされる。ここでは特に、「二重活動」論を用いた第 17 論考（II, 6）の説明が、後に書かれた第 43 論考（VI, 2）で撤回される経緯という解釈上の問題に取り組む。従来研究者たちは、プロティノスの立場がペリパトス派的な見方からプラトン的思想へと変化したと見なしてきたが、西村論文はそういった読解に疑問を呈し、第 17 論考で曖昧に語られていた内的活動の実態が明瞭化されたとの解釈を示す。これは、プロティノスがアリストテレスを批判的に受容してプラトン主義を徹底させた一例である。

第 6 章は、魂の一性・多性というプロティノスの思想（第 4 章）が独自の感覚論に反映される過程を詳細に追う。「魂は非受動的である」というテーゼに基づきながら、魂が対象を直接把握するという感覚論がどのように展開されるのかという難しいテーマが論じられ、感覚器官と感覚対象の間で生じる「様態の共有」（共受動）を用いた、哲学史的にも特異な感覚論であることが解明される。

最後に第 7 章では、魂と知性の関係が詳論される。「魂が知性と異なる点は、魂が思考のうちにあることである」というプロティノスの難解な主張は、魂の存在と認識能力をめぐる独自の関係に基づく。他方で、第 49 論考（V, 3）で彼は、思考にも知性と同様な認識を認めるが、この知性認識はすべてのイデアを自己自身として捉える「自己認識」であると見なす。知性における完全な自己知とは「私は『ある』である」というすべてが同一である認識であり、人間の魂にはそのような自己認識はないが、知性に由来してそれに依存する限りで自己認識は認められている。それは、真の自己を知らないことの自覚である。さらに、魂が知性となり完全な自己認識を実現する可能性は、魂の一部が知性のうちに留まることによると、プロティノスは論じる。この理論は、神的なものとの合一という彼自身の神秘体験に基づくものと通常は解釈されるが、西村論文はむしろプラトン哲学、とりわけ『パイドン』の解釈として捉え直す。

プロティノスが展開した神秘主義的な哲学は、プラトンから受け継いだ哲学をギリシア哲学史において練り上げた思索の成果に他ならない。その哲学の中心テーマにあったのは、探求する主体である魂であったと、本論文は結ばれる。

審査の概要

西村洋平君の「プロティノス魂論」は、西洋古代哲学でプラトン、アリストテレスと並んで重要とされるプロティノスの哲学に正面から挑み、これまで海外の研究者の間でも散発的な考察に留まってきた「魂」論を、本格的かつ総合的に読解しようとする野心的な試みである。プロティノスは「新プラトン主義」の創始者として、後世の哲学者への影響がつねに意識される一方で、彼自身がどのような哲学的背景から独自の思索を練り上げたかについては、まだ研究は十分とは言えない。西村君の論文は、プロティノスの思想を古典ギリシア・ヘレニズム哲学の伝統において批判と受容の観点で位置づける、正統な哲学史研究となっている。

プロティノスはプラトン哲学に依拠しつつ独自の哲学と文体を作り上げた思想家として評価されながらも、その論述の難解さや神秘体験への偏見にも起因して、孤立して取り扱われることが多かった。だが、そういった従来のアプローチを批判しながら一貫して哲学史において位置づけようとする本論文は、古代哲学の扱いについて大きな示唆を与えてくれる。そこで見えてくるのが、プラトン哲学を受け継ぎ徹底させた一人の独創的な哲学者である。

本論文については、2014 年 12 月 19 日に主査・副査による論文審査会を公開で開催して問題点を議論した。そこでは、主に 3 つの側面で高い評価が与えられた。

まず、プロティノスの「魂論」という重要な課題に焦点を当て、明晰でかつ包括的な分

析を加える全体の試みが評価される。その全体像を基本から読み解く試みとしての学術的価値もさることながら、哲学研究に広く共有される開かれた解釈と明瞭な論述が与えられている点はとりわけ評価に値する。プロティノス研究ではこれまで存在論が主な関心となっており、「魂」それ自体に焦点をしぼって徹底的に取り扱う試みは多くない。しかも、そこでは、一見矛盾しているように見える論述があり、通常の哲学議論としては理解困難な表現が多々登場するため、全体像を理解可能な形で提示することに大きな困難が感じられてきた。西村論文はこの状況を打開し、プロティノスの魂論をその存在論・認識論において正しく位置づける試みとして、一定の成功を収めている。

第 2 に、『エンネアデス』の関連論考を丁寧に読み解き、時に解釈の分かれる難解な文章を詳細に読み解き立論を展開している点が評価される。全部で 54 編に分けられた著作のうち、論考 10（V, 1）、2（IV, 7）、8（IV, 9）、27（IV, 3）、17（II, 6）、43（VI, 2）、49（V, 3）の 7 編について諸解釈を検討し、その読解を全体像に据えようとしている。プロティノスの著作は書かれた時期と主題によって内容に異同があり、扱いは容易ではない。西村論文は、「魂」論にとって重要であると判断したこれらの論考を、他の議論や背景との関係で慎重に分析している。プロティノスの基礎研究として評価される点である。

第 3 に、「われわれには見えない彼の思考の道筋を探って行く」（14 頁）という方針のもとで、プラトン、アリストテレス・ペリパトス派、ストア派といった先行者との対決からプロティノスの立場を分析する哲学史的考察が評価される。プロティノスは基本的にプラトン哲学に依拠してそれを解釈するという明確な意図を持っているが、両者の関係についても正確な分析は容易ではない。この点で、西村論文は『ティマイオス』や『パイドン』の魂論という限定においてではあるが、プラトンをどう受け継いだか、見取り図を描いている。他方で、プロティノスが必ずしも表立って論じないアリストテレス・ペリパトス派、ストア派等との関係の分析は、明確で説得的である。さらに、これら先行哲学に加えて、プロティノス以降の「後期新プラトン主義者」との違いも諸論点に即して明示され、彼の独自性や意義が示されている。

こういった点が評価される一方で、審査委員からは、いくつかの重要な問題点も提起された。主に 4 点が挙げられる。

まず、論文が扱う範囲の広大さと複雑さゆえに生じる方法論的な問題に、より一層の配慮が必要であるとの指摘がなされた。とりわけ、プロティノスと先行哲学との関係という視点では、プラトン、アリストテレス、ストア派といったそれぞれの哲学の内容、及び、それがローマ時代までどのように受け継がれて理解されていたのかという経緯という二重性において、哲学的・哲学史的にきわめて該博な知識と徹底した研究が要求される。西村論文では先行哲学者の扱いが概括的に留まる部分も見られ、各先行学説について本格的な

考察を控える態度にやや物足りなさが残った。今後はより徹底した研究方法が必要となろう。また、哲学史とプロティノス研究の間で方向性を見失いがちであるとの指摘もなされた。哲学としての「魂論」と哲学史上の位置づけという 2 つの課題を、分裂させずに統合する研究的視点が求められる。

第 2 に、「魂」について個々の論点を扱う一方で、それらが全体としてプロティノスの「魂論」をどう構成するのかという「全体」像がまだ明瞭に見えてこないとの指摘もなされた。とりわけ、本論文では、「魂」の基本的な位置づけを扱う第 2 章から第 4 章の後で、第 5 章から第 7 章まで「諸問題」が付け加えられるが、それらが構成上でやや統合性を欠く印象を与えている。「魂論」を扱うとは、全体としてどのような体系かを見ていくことであり、そのためにどの問題を論じるべきかという明確な見通しが、まず提示されるべきであった。この点でもさらなる研究の深まりが必要となろう。

第 3 に、哲学の議論そのものの問題性である。難解で有名なプロティノス論考を哲学的に理解可能な形で分析する手腕は評価されるものの、まだ哲学議論として理解しづらい叙述があることも、いくつか具体的に指摘された。とりわけ、現代の認識論にどのような積極的な意義を持つのか、そういった哲学的フレームワークでのより明確な意識が求められる。だがこれは、プロティノス研究、さらには古代哲学研究一般に課せられた課題である。

最後に、「魂」をめぐる理論、即ち、存在論と認識論（感覚論）は詳細に論じられたものの、プロティノスが強調する実践性、つまり魂の経験という側面にほとんど触れられない点が、評価の分かれるところとなる。西村君はプロティノスが「神秘主義者」というレッテルで偏って理解されていることを強く意識して、彼の神秘体験記述から意図的に距離をおく。プロティノス哲学は彼の個人的体験に還元すべきではなく、古代の哲学的伝統の中で把握されるべきである。だが、この明確な方針がかえってプロティノスの本質を曇らせているのではないか、そのような指摘も審査員からなされた。「魂」については、理論と経験とのつながりがさらに探求されるべきであろう。

以上のように、論文審査会ではいくつかの重要な問題点が指摘され、議論されたが、これは西村論文の基本的な価値を損なうものではなく、むしろ本論文が達成した成果の意義を今後に活かして発展させるための示唆となるはずである。西洋古代哲学でも、プラトンとアリストテレス以外の哲学者や時代は、日本ではまだ研究がきわめて手薄である。そこで堅実な文献読解から哲学史の豊かな議論を組み立てる西村君の論文は、この分野において新鮮で貴重な成果となっている。審査員一同は、本論文がプロティノス哲学の研究論文として、高い学術的価値を有しており、博士（哲学）の学位に相応しいと判断する。

西村洋平君の学識確認をいたしました。

学識確認　　慶應義塾大学文学部教授　　納富　信留
　　同大学院文学研究科委員